

# 古文書を読む会学習記録

作成日 平成28年10月29日

<b>開催日</b>	平成28年10月27日	<b>時 間</b>	10:00～12:00
<b>場 所</b>	区役所リハーサル室	<b>出席人数</b>	13名
<b>講 師</b>	真田 雅行氏	<b>作成者</b>	堀井 克子
<b>テーマ</b>	第二学習 芭蕉翁終焉記①		
<b>概要</b>	<p>これは松尾芭蕉の高弟・宝井其角が、臨終まで旅に生きた憂愁の詩人芭蕉の生涯とその思い出を綴ったものである。</p> <p>○「はなやかなる春はかしら重く、まなこ濁りて心うし、」と華やかだが物憂い春をうたい、続いて「泉石冷々たる納涼の地はことに湿気をうけて夜もねられず、朝むつれたり」と夏を、更に秋冬「秋はただかなしひを添る、腸をつかむはかりなり」、「ともかくもならでや雪の枯尾花」と四季の自然の描写に合わせ、長途の旅を生き延びてきた生前の芭蕉の印象を綴りながら、無常観と共に旅の疲れで身体の衰える様などを描く。</p> <p>○「此の翁孤独貧弱にして徳業とめる事無量なり」と別の角度から芭蕉を回顧。天和3年（1683）（2年の誤り）深川の草庵が急火に包まれた折の状況も記す。また、再建草庵に植えられた芭蕉の木からそれまでの号を「青桃」から「芭蕉」庵と呼ぶことになり、雨中吟で（はせを）「野分して鹽に雨を聞く夜かな」の作から芭蕉号を使用した（実際は旧庵から芭蕉の木はあったので再建草庵というのは其角の勘違い）。</p> <p>○ 「花の雲鐘は上野か浅草か」と芭蕉庵からの一帯のながめを詠む。</p> <p>○貞享元年（1684）故郷の母を偲びがてら知利（千里）を伴い大和路やよし野へ吟行「野ざらし紀行」の旅へと出る。</p> <p>「露とくとく心に浮世すゝがばや」</p> <p>○ここからは旅の側面からの芭蕉への回想、特に「奥の細道」の旅の終りまでが述べられ、ここで蕉風が確立されたことが記される。</p> <p>一方で長旅の疲れか元禄3～4年頃（1690～91）は気力の衰えが激しく、「幻住庵」や「義仲寺」など大津近郊で過ごす。</p> <p>「病雁の片（堅）田におりて旅寝哉」</p> <p>病身ながら近畿近郊の旅や江戸との往来を継続（芭蕉入滅は元禄7年（1694））。</p> <p>参考資料 ○芭蕉翁年譜 ○芭蕉紀行足跡図</p>		
<b>予定</b>	平成28年11月10日 10:00～12:00 於;区役所リハーサル室 第一学習 赤井村 石井家文書⑫		